

	<h1 style="color: red;">Tさんのこと</h1> <h2 style="color: red;">SCE・Net 小林浩之</h2>	<p style="color: red;">E-75</p> <p style="color: red;">発行日 2015.5.16</p>
---	---	--

サラリーマンの人生は、上司にめぐまれるかどうかにかきまわることがある。

昭和 30 年代も末のころ、当時三菱化成は自分のグループに三菱油化という石化専門の会社を作ったにもかかわらず、わかりにくい話だが、遅れて、化成水島という子会社を作り石油化学に参入しようとしていた。エチレンの大きな消費先である高密度ポリエチレンは、化成の石油化学事業に必須の誘導品と位置付けられた。しかし、海外の先発メーカーの製造技術は日本の石油化学の先発メーカーにライセンスされていて、売ってくれる会社も存在しなかったため、自ら製造技術開発に乗り出した。まず、世界の特許を読み、世界の技術を知り、そしてその特許の網の目を探ることから始めたのである。Tさんは、そのリーダーの一人であった。私は入社してしばらくして、そのTさんの部下となった。それから 30 年後、会社を離れられて間もなく倒れられたとき、私は水島事業所で勤務していたので、鎌倉で行われた告別式に駆けつけるのがやっとであった。脳内出血であったという。したがって、闘病の期間は短かったと記憶している。平成 10 年の春のことである。

離れていてももうしばらくは、指導をいただきたかっただけに、早世されたのは無念と言うしかなかった。

昭和 41 年に、私は黒崎のポリエチレン開発部重合試験科に配属された。その時、水島工場でいち早くスタートしていた第 1 技術のプラントに運転トラブルがあり、水島の現場では、後には武勇伝にもなるが、塗炭の中にあり苦戦をしていた。当時は右肩上がりの経済で、技術の真贋より、事業でいち早く先に出ることの方が優先された時代である。その後の韓国や台湾の志向に似ている。翌年には私が化学工学出身であるということもあり、まずはトラブルシューターの一人として、Tさん率いる中間試験科に移動することになった。その時がTさんによる、長くはないが密度の濃い指導を受ける始まりとなる。トラブルは間もなく小康状態に入り、本来のプロセス開発に参加する。昭和 42 年の夏のことであった。

Tさんは、新旧両方の学制を経験されていたが、まだ旧き時代の男気があった。厳しさと道理の一貫性、温かみをお持ちであり、そのことは部下が信頼と親しみを感じながらも、近寄りたくも感じさせるゆえんでもあった。カラオケのない時代、歌は“坊がつる賛歌”か“琵琶湖就航の歌”である。そして、お宅に伺えば、ご本人より 10 歳以上も若くて可愛い奥様がお迎えになるのは意外な感じもしたが、Tさんの人柄を知るにつけ、容易に納得できるものとなった。奥様の卒業を待たずに迎えられたと聞いた記憶がある。何よりも男のロマンと情熱を持ち続けられたかたであったのである。ご本人は、ことあるたびに、「俺は浪花節の男だ」と主張に近い自己弁明をされていた記憶がある。その通りなのだが、

感心しても真似は出来ないことだが、頭脳が恐ろしく明晰な方であり、他人には怜悯、冷静にみられていてご本人はそれを気にして、否定することに務められていたのである。会社の安い厚生施設の畳に胡坐をかいて飲み交わした時代のことである。ただ、夜は苦手だったのかもしれない。さっきあげた二つの歌のほか思い出さない。議論になる。あまりに書生ぼくあったのかもしれない。

第2技術のポリエチレンの製造プロセスは、チーグラ触媒を使用しない無脱灰の溶液法であったが、その開発のプロジェクトはその経済性と運転性から断念せざるを得なかった。加えてチーグラ触媒の基本特許が切れた時期で、いち早く、第3の技術たるチーグラ触媒を使用する新しいプロセス開発に方向転換した。

そのようなことがあり、昭和44年の晩秋には、私は黒崎を出て水島に転じた。Tさんは全ての終戦処理を済まされて、翌45年に第3技術の高密度ポリエチレン製造のリーダーとして水島に移られた。

当時三菱化成は旭化成と共同で30万プラントを建設しようとしていたこともあって、高密度ポリエチレンは、触媒開発と中間試験を行いながら、片方で本格プラントの設計、建設を併行するという、経験した最初のコンカレントなエンジニアリングであった。横浜の総合研究所から、水島の樹脂技術部、製造部、施設部の設計グループと保全グループまでが同時に参加するという、意識せずとも先を効率的すすめたいという会社の意志の現れだったと思う。以後私はこのやり方でいろいろな仕事をすることになる。その中で、Tさんは、本格プラントの設計、建設のプロジェクト・マネジャーとその中間試験課の課長も兼務された。やがてポリプロピレンの中間試験にいた私もすぐに高密度ポリエチレンの中間試験に呼ばれ、中間試験の運転に加え、本格プラントの設計にも参加し、試運転にも参加することになった。数多く叱られもし、指導も受けた。ある休日、中間試験プラントに私だけが出勤しているとき、ポリマー乾燥機用ブロワーが故障し運転を止めた。勝手に顔なじみの業者を呼び修理し運転を再開させた。私自身は上司にも頼らず自分一人で行ったことに、少しは得意げな気持ちもしていたのだが、このことをきつく、咎められた。このことをよく記憶している。いわゆる、「報連相」を怠ったということであるが、結果がよかったということに関係なく、仕事の作法の重要性を教えられることになった。中間試験プラントで閉塞した熱交換器の解放、閉塞開通作業中に運転員が火傷するという事故があり、つらい記憶として残っているが、それ以上にこのブロワーの故障のことは心に刻み付けられた。

第3技術のプラントは順調にスタートする。私は試運転が終了したあと所属部署が変わったが、時間を経てTさんが製造部長をやられたとき、私は工務室部長代理として、いわば部長秘書官として仕えたことがある。当時日本各所の石化コンビナートが水島も含めて保安事故を起こしたときで、部長と工務室部長代理は同時に場所から離れてはいけないというお達しがあった。ところが、私が水島でのポリプロピレンの製造プロジェクトを率いた時の部下であり、後に日本ポリプロピレンという日本で最大のポリプロピレン事業を経

営することになるF君の結婚式と私の愚弟の結婚式が同日の午前の横浜と午後四谷と重なってしまった。TさんはF君の主賓として出席される予定であったが、やむを得ず水島に残られて、F君には役者が違って申し訳なく感じたが、私が主賓の代理も勤めることになった。主賓として“かもめのジョナサン”を引用して、他人より誰よりも高く飛べというような意味の挨拶をしたことを覚えている。懸命の祝辞であり、挨拶のつもりだったが、F君本人はどう思っていただろうか。ともかく、これは、或る意味人生観であり価値観と言えるが、このような時でも毅然として、姿勢を崩されることはなかったのである。

時に、事故にも出くわしたこともある。高圧ポリエチレンの異常反応であるデコンポジションである。異常反応によって安全弁として取り付けられた破裂板が吹くと、空中で着火して爆ごうによる音と火焰が上がる。安全弁が吹いたのであって事故とまでは言えないというのが私たちの論理ではあるが、周辺の集落を音と炎で脅かすということもあって、事故扱いにされた。実際には現象は瞬時に起こり、防災隊が結成された時には、スタックベントから出るガスに着火した小さな炎を見守ることくらいしかやるべきことはない。その火が、ガスが尽きて消えるまで、部防災隊長として、凜として立っておられた姿を思い出す。私はそのそばで参謀役をつとめた。

スポーツは不得意の方であり、囲碁やマージャン、コントラクトブリッジなどの室内協議派であったが、遅くなってテニスを始められ、そのあとはゴルフもやり始められた。既に鬼籍にはいられたUさんや私と同期入社の方Oさんをいれての真夏の午後の炎天下のテニスも忘れられない。その頃、工場は土曜日でも通常勤務であったが、その日の午後には指名がかかる。時には、テニスが終わった後メンバーを入れ替えて、社宅団地の宿泊棟でのマージャンをすることもあった。Tさんのテニスは大鳥が身の前に羽をたたむように、球を打ち終わると両手が前に揃う独特のフォームであったのを目のあたりに思い出す。最後までうまくいったとは言い難かったが、その熱意は仕事のそれに通じるものがあつた。

そんなお付き合いののち間もなく三菱モンサントという合弁会社に出られ、四日市に転勤された。私との仕事のつながりはここで終わる。その後、Tさんは潤滑油助剤を製造するその子会社に出られた。確か敗戦処理にも近いお仕事であったと記憶する。技術屋のなかの技術屋というような理詰めで、頭の切れる方との印象が強いが、それ以上の大きな舞台には上がられなかったということである。居られなければその事業はうまくはいかなかったに違いない。人事は常に不公平なものだと、Tさんを知る人は感じたに違いない。

Tさんが転出された後しばらくして、私は本社に転勤し、また水島に戻り、平成6年には、長年の商売敵でもあつた三菱油化と、そのことが引き金となって合併し三菱化学が誕生する。そのせいでそのあと四日市を経てまた、水島に戻った。そして、突然の訃報に接することになる。引退されて間もないころであつた。

上司に恵まれたかどうか判断するにはあまりにも早い別れとなつてしまった。水島時代に、時に私の子供の面倒も看ていただいた奥様もさすがに年を重ねられたが横須賀にお元気である。今でも、愚妻が月に一度、木彫の指導を受けに通っている。もっとも、最近

は奥様が体調を壊された時期もあって、間隔がまばらになりがちである。

上司ともども懸命に走りながら、家族ぐるみの思い出を作ることとなった。  
今でも青春の挽歌が聞こえてくるような気がする。

(2015. 5.12 記 )